

曾良の『旅日記』に於る神と仏とに関する表現 補遺

文学研究科国文学専攻博士後期課程満期退学 相澤 泰司

一 はじめに

曾良の記した元禄二年（一六八九）と同四年との日記中、神仏をめぐる表現がどうなっているか、主として神社仏閣等に関する表現について、拙稿「曾良の『旅日記』に於る神と仏とに関する表現」^(一)に於て考察した。その際、「参」、「詣」、「拜」、「見」、「行・往」、「至・到」、「趣」、「尋」の各字に関する使われ方について調査した。その結果、神・神社については「参」「詣」「拜」などの敬意表現が、仏・寺院についてはそれ以外の敬意を含まない表現が用いられていることを、例外はあるもの的大まかな傾向として確認した。

曾良の『旅日記』中、このような傾向があることは、同拙稿に於いても記しておいたように、既に上野洋三氏の論考「旅日記の曾良」によって「寺院仏閣は『見・見テ通ル・見物・寄・宿』などと記され、これに対して神社・神宮は『拜・詣・参』などと記述される。それが原則である。」^(二)と指摘されている。

本稿では、この上野氏の指摘のうち、前稿では紙幅の関係で検討できなかった「寄」、「宿」についてあらためて調査確認することを用意している。

二 「寄」について

元禄二年・四年を通じて「寄」の使用例を別表に示した。

表中、「対象」欄は「寄」字が用いられている対象を大まかに分類したもので、特に寺社に関しては●を付した。もとより不明な箇所も少なからずあり、また執筆者の恣意も皆無ではないことを前提にしつつ言及する。

使用例は全部で三九例あった。但し元禄二年四月十九日「信濃守増栄被寄進之由」、同年同月二十日「土中古土器有。寄妙二拜」の「寄妙」の意で用いられている例、同年同月二十一日「一家衆寄合」、四年五月十八日「神前へ向へハ右山寄」の四例を除外してある。

一見して分るのは元禄二年よりも四年の方が使用例が多いことである。これは元禄二年『おくのほそ道』の旅が、ほぼ「一方通行」的であるのに対し、元禄四年の旅で曾良は京都に長らく滞在し、市中で知人宅を訪ねては宿泊することを繰り返し返しており、また京都を拠点のようにして周辺を周遊しているからである。

特に度々登場するのは「田中」、「荒右」、「小川」である。田中は、当時京都に居た神道家田中式昭（後に式如と改名）を指し、「荒右」は中村荒右衛門・史邦を、また「小川」は野沢凡兆の住居があったと想定される小川榎木町（現在の東魚屋町付近、或いはその北側の八幡町近辺）を指している。

「寄」別表中の「対象」の項目では、寺社若しくはその可能性が高いものについて種別を記した。これを見ると確かに元禄二年については上野氏の指摘のように、寺社の別で言えば寺のみということになる。しかし元禄四年まで含めて見てみると、神社にも寄っており、必ずしもそうとは言えないのではなからうか。尤も北野社に関しては、曾良と面識があったと推測される神人の家に泊まっていた可能性はある。これを神社としての北野に寄ったのではなく、その神人の家に寄ったと考えると、神社に寄った例は少なくなるかもしれない。

また、前稿で扱った「見」の場合、その全使用例に占める「仏」や「神」に対する用例は、一四〇例中、神仏併せて表記している三例も含めれば、実に六二例という半分近くを占めている。神事に対

する場合も含めれば更に十二例が存在する。対してこの「寄」の場合には全三九例中、寺に対して用いられている例は七例に過ぎず、抑々全体に占める割合自体が低い。このように表全体を見渡すと、「寄」は主として人物の許を示している例が大部分であり、特別な意味や意図を以て「寺」に対して用いられているようには見えない。寺にしても神社にしても、特有の表現であったり、特段の使い分けの意識は無いように思われる。

三 「宿」について

続いて同じく上野氏が指摘している「宿」についても、その使用例を別表に示した。「対象」欄については「寄」と同様である。

全部で一六八例ある。主として「宿ス」と表現される「宿泊する」の意と解されるものを挙げた。文末の「宿」と送り仮名が無い場合も、その省略と考えられるものはこれに含めてある。

但し次のような例は除外している。

一つは「飯塚ノ宿」や「簾宿」のように固有名詞を指す場合。またもう一つは「宿」が名詞であって、「宿ス」とは異なり、宿泊した意とは捉えにくい場合である。

例えば「宿ヲ出／立／過」、「宿へ移／尋」、「宿ニテ」、「宿カシカネシ」（貸しかねし）等は除外している。また「宿ノ主」や「追込宿」、「宿ムサカリシ」、「宿キレイナリ」など、宿場や旅宿自体につ

いて言及した場合である。このような例は四四例あった。

なお、これは右の除外例と抵触するかもしれないが、表に残した例として次のようなものがある。元禄二年四月二日や二十一日、七月十五日のような「宿(ヲ)カル」(借る)、元禄四年七月八日「宿不借シテ」、元禄二年七月三日「宿取テ」等である。これらは建物や場所を示しているというよりは、「宿泊する」という意識のもとに用いられていると、ひとまずは判断したためである。

また判断に迷った次のような例も別表に残した。

例えば元禄二年五月四日「宿国分町」、同年五月八日「宿治兵へ」、同年五月二十七日「宿預り坊」、七月五日「宿たわらや六良兵衛」、七月八日「宿六左衛門」などの例である。これらは一応「宿は……」のように、宿を主語として説明をした表現とも考えられるが、曾良が時折り用いる漢文的な語順の表現だと考えると、「国分町(二)宿(ス)」と読む可能性も捨て切れないためである。

元禄四年三月二十九日「上市へ下テ吉野宿」も迷ったが、同日の最後の記述で文末にあたるので「宿ス」の意と取った。

また五月九日「叡明寺殿被宿岩窟」、五月十一日「戸いま宿不借」、七月六日「宿、古川市左衛門方ヲ云付ル」も一応宿泊の意識があると判断して残したが微妙である。特に五月九日の例は、直接曾良の行動に言及しているものではないためになおさらであろう。

さて、右の点を踏まえつつ別表「宿」中の神社の別を見ると、この場合も、既述の「寄」についてと同様のことが言えるだろう。確

かに元禄二年はもとより、四年も「宿」しているのは寺の方が多い。「宿」の場合、用いられている対象は、殆んどが「地名」「場所」「人名」であって、寺にしる神社にしる、それを対象とした表現例の占める割合は「寄」と同様、多いとは言えない。

更には、例えば元禄二年五月二十七日「宿預り坊」(山寺)や同年六月七日「堂者坊二宿」などの例は、寺だから「宿」の表現を用いているというよりは、文字通り宿泊の意義が大きかったからだと考えられる。

元禄四年六月十日の「本福寺ヲ尋テ宿ス」も同じことが言える。この本福寺の所在地は天津市堅田の本福寺ではなく、曾良の記述から長等にあつた同時の修行道場であり、同様に本福寺と呼ばれていたと考えられている^(三)。この長等の本福寺は蕉門の俳諧作者であつた千那の兄が住職を務めており、曾良はその伝手でここに宿泊したと考えるのが自然であろう。

更に、このように寺が単に宿泊先として考えられる場合は神社に対しても同様に当てはまる。元禄四年に「宿」した場所として何度か北野天満宮が登場する。しかし既に「寄」の箇所でも触れたように、北野天満宮に何度も参拝したわけではなく、文字通りに宿泊していたと考えられる。

すなわち神社であるにもかかわらず「宿」の表現を用いていると考えるよりは、やはり宿泊することに主眼が置かれていたためだと理解するのが自然ではなからうか。

四 結語

以上見て来たように、上野氏の指摘通り、「寄」「宿」にせよ、確かに寺に対して比較的によく使われているとは言えるかもしれない。

しかし両字の用いられ方に於て、抑々「寺」や「神社」を主たる対象としたものではないと考える方が妥当性があると思われる。つまり「寄」にせよ「宿」にせよ、この両字は、前稿で取り上げたような「拝」に対する「見」、「詣」「参」に対する「行」「往」のような対照を想定すること自体が本来難しいと考えられる。

注

(一) 二〇一七年東洋大学大学院紀要第五十四集。

(二) 上野洋三『芭蕉論』（筑摩書店、一九八六）二五七ページ。

(三) 田中善信『全釈芭蕉書簡集』（新典社、二〇〇五）七九ページ、

貞享二年五月十二日千那宛書簡。

曾良旅日記の「寄」

番号	No.	年月日	本文	対象
1	1	元禄2・4・29	本實坊へ寄	●寺
2	2	元禄2・5・28	又内蔵二逢。立寄ば持賞ス。	人名
3	3	元禄2・6・27	湯本へ立寄	地名
4	4	元禄2・7・8	春庵へ不寄シテ	人名？
5	5	元禄2・8・10	西福寺へ寄、見ル。	●寺
6	6	元禄2・8・16	平右へ寄。	人名
7	7	元禄2・9・3	春老へ寄	人名
8	8	元禄2・9・16	大智院へ寄。	●寺
9	9	元禄2・9・27	荷兮へ寄テ	人名
10	10	元禄2・10・	平右衛門へ寄テ	人名
11	11	元禄2・11・	川田氏へ寄。	人名
12	12	元禄4・3・25	田中へ寄テ	人名
13	13	元禄4・3・28	ワキ戸へ寄 翁ヲ尋ル	地名
14	14	元禄4・4・14	本宮尾崎へ寄	●神社(社家)
15	15	元禄4・4・29	東寺へ寄	●寺
16	16	元禄4・5・1	大徳寺へ寄	●寺
17	17	元禄4・5・2	允昌へ寄テ	人名
18	18	元禄4・5・6	田中氏へ寄	人名
19	19	元禄4・5・16	田中へ寄	人名
20	20	元禄4・5・18	賀茂へ寄テ	●神社(社家)
21	21	元禄4・5・18	茶やへ寄	場所(茶屋)
22	22	元禄4・5・18	荒右へ寄	人名
23	23	元禄4・5・19	田中へ寄	人名
24	24	元禄4・5・19	北野へ趣 晩方又寄	●神社(社家)
25	25	元禄4・5・20	荒右へ寄	人名
26	26	元禄4・5・21	田中へ寄テ	人名
27	27	元禄4・6・7	三条苅や町へ寄テ	場所
28	28	元禄4・6・11	乙州へ寄	人名
29	29	元禄4・6・13	田中へ寄テ	人名
30	30	元禄4・6・15	田中へ寄テ	人名
31	31	元禄4・6・16	田中へ寄	人名
32	32	元禄4・6・18	知積院へ寄	●寺
33	33	元禄4・6・22	田中へ寄テ	人名
34	34	元禄4・6・25	中村へ寄へ	人名
35	35	元禄4・7・2	若江へ寄	地名
36	36	元禄4・7・10	カサギへテ寄テ	地名
37	37	元禄4・7・16	幽玄へ寄テ	人名
38	38	元禄4・7・24	光丘寺へ寄ル	●寺
39	39	元禄4・7・25	松井へ寄	人名？

曾良旅日記中の「宿」

No.	年月日	本文	種別
1	元禄2・4・1	五左衛門ト云者ノ方ニ宿。	人名
2	元禄2・4・2	名主ノ家入テ宿カル。	人名
3	元禄2・4・16	壹里半餘。宿角左衛門	人名
4	元禄2・4・17	角左衛門方ニ猶宿。	人名
5	元禄2・4・21	矢吹ヘ申ノ上剋ニ着宿カル。	地名
6	元禄2・4・22	乍単齋宿、俳有。	人名
7	元禄2・4・29	郡山ニ到テ宿ス。	地名
8	元禄2・5・1	福嶋ヘ到テ宿ス。	地名
9	元禄2・5・2	飯坂ニ宿、	地名
10	元禄2・5・3	白石ニ宿ス。	地名
11	元禄2・5・4	仙臺ニ着。其夜、宿国分町	地名
12	元禄2・5・5	山口与次衛門丈ニ而宿ヘ断有。	人名
13	元禄2・5・8	宿、治兵ヘ。	人名
14	元禄2・5・9	寂明寺殿被宿岩屈有。	場所
15	元禄2・5・9	松嶋ニ宿ス。	地名
16	元禄2・5・10	四兵ヘヲ尋テ宿ス。	人名
17	元禄2・5・11	石ノ巻ヲ立。宿四兵ヘ、	人名
18	元禄2・5・11	戸いま(伊達大蔵、検断庄左衛門)宿(儀左衛門)不借	人名
19	元禄2・5・11	仍検断、告テ宿ス。	人名
20	元禄2・5・12	一ノ関黄昏ニ着。合羽モトヲル也宿ス。	地名
21	元禄2・5・13	主、水風呂敷ヲシテ待、宿ス。	人名
22	元禄2・5・14	岩手山ニ宿ス。	地名
23	元禄2・5・16	塚田ニ滞留。大雨、宿。	地名
24	元禄2・5・17	清風ヘ着、一宿ス。	人名
25	元禄2・5・21	清風ニ宿。	人名
26	元禄2・5・23	ソノ夜清風ニ宿ス。	人名
27	元禄2・5・27	宿預リ坊。	●寺
28	元禄2・6・1	風流ニ宿ス。	人名
29	元禄2・6・7	△堂((道))者坊ニ一宿。	●寺
30	元禄2・6・7	月山、一夜宿。	●寺
31	元禄2・6・15	吹浦ニ宿ス。	地名
32	元禄2・6・16	向屋ヲ借りテ宿ス。	場所
33	元禄2・6・25	宮部弥三良(状添而丸や義左衛門方ニ宿。)	人名
34	元禄2・6・26	鈴木所左衛門宅ニ宿。	人名
35	元禄2・6・27	中村ニ宿ス。	地名
36	元禄2・6・28	村上ニ着、宿借テ	地名
37	元禄2・6・29	未ノ下剋、宿。久左衛門同道ニ	場所(村上旅宿)
38	元禄2・7・1	つゝ地村次市良ヘ着、宿。	人名
39	元禄2・7・2	新泻ヘ申ノ上刻、着。一宿ト云、	地名
40	元禄2・7・3	弥彦ニ着ス。宿取テ、	地名
41	元禄2・7・4	出雲崎ニ着、宿ス。	地名
42	元禄2・7・5	至鉢崎、宿たわらや六良兵衛。	人名
43	元禄2・7・6	宿、古川市左衛門方ヲ云付ル。	人名
44	元禄2・7・7	佐藤元仙ヘ招テ俳有テ、宿。	人名
45	元禄2・7・8	宿六左衛門	人名
46	元禄2・7・11	玉や五良兵衛方ニ宿。月	人名
47	元禄2・7・12	市振ニ着、宿。	地名
48	元禄2・7・13	滑河ニ着、宿。	地名
49	元禄2・7・14	高岡ニ申ノ上刻、着テ宿。	地名
50	元禄2・7・15	金沢ニ着。京や吉兵衛ニ宿カリ	人名
51	元禄2・7・24	小森ニ着。竹意同道故、近江ヤト云ニ宿ス。	場所
52	元禄2・7・25	山王神主藤井伊豆宅ヘ行。有會。終而此ニ宿。	人名
53	元禄2・7・27	泉屋久米之助方ニ宿ス。	人名
54	元禄2・8・5	全昌寺ヘ申刻着、宿。	●寺
55	元禄2・8・7	森岡ニ着。六良兵衛ト云者ニ宿ス。	人名
56	元禄2・8・8	今庄ニ着、宿。	地名
57	元禄2・8・9	氣比ヘ參詣シテ宿カル。	●神社?
58	元禄2・8・9	本隆寺ヘ行テ宿。	●寺
59	元禄2・8・12	鳥本ニ趣テ宿ス。	地名
60	元禄2・8・13	関ヶ原ニ至テ宿。	地名
61	元禄2・8・14	如行ヲ尋、留主。息、止テ宿ス。	人名
62	元禄2・8・15	小寺氏ヘ行、道ニ逢テ、其夜、宿。	地名?
63	元禄2・9・2	長禪寺ヘ行而宿。	●寺
64	元禄2・9・10	長禪寺ヘ行テ宿。	●寺
65	元禄2・9・11	堤ゼコ到テ雨降ル。則宿。	地名?
66	元禄2・9・15	至テ津ニ宿。	地名

曾良旅日記中の「宿」

No.	年月日	本文	種別
67	元禄2・9・16	五良左へ移ル。當番故隠居ニ宿ス。	人名
68	元禄2・9・25	越人ニ宿ス。	人名
69	元禄2・10・6	至龜山ニ宿ス。	地名
70	元禄2・10・	庄野ニ至テ宿ス。	地名
71	元禄2・10・	荷兮ニ至ル。宿ス。	人名
72	元禄2・10・	山口ニ至テ兩晩宿ス。	人名?
73	元禄2・10・	越人ニ宿ス。	人名
74	元禄2・10・	井戸田へ着。為麿と談ジテ宿。	人名?地名?
75	元禄2・10・	藤川ニ宿。	地名
76	元禄2・10・	藤川ニ宿。大仏ノ道ノ口ヲ求ス。同宿ス。	?
77	元禄4・3・4	安適ニ一宿	人名
78	元禄4・3・21	安田ニ一宿	人名
79	元禄4・3・22	坂下ニ一宿	地名
80	元禄4・3・24	田中氏ヲ尋テ宿	人名
81	元禄4・3・25	大和や戻 宿	地名
82	元禄4・3・26	淀宮地氏ヲ 尋テ宿	人名
83	元禄4・3・27	手飼ニ宿	地名
84	元禄4・3・28	デラソジト云所ニ宿ス	地名
85	元禄4・3・29	上市へ下テ吉野宿	地名
86	元禄4・4・1	孫七ニ宿	人名
87	元禄4・4・2	市左へ行へ一宿	人名
88	元禄4・4・9	大又へ着 夜中甚雨 下市ノ者ト同宿	地名
89	元禄4・4・10	長井ト云所ニ宿	地名
90	元禄4・4・11	尾崎 宿ヲ借	地名
91	元禄4・4・13	ウケ川ニ宿ス	地名
92	元禄4・4・14	近露ニ未中剋ニ宿ス	地名
93	元禄4・4・15	イナメニ宿	地名
94	元禄4・4・16	門ヤト云所ニ宿	場所
95	元禄4・4・17	カタニ至テ明神ヲ拝 風景ヲ見テ宿	地名
96	元禄4・4・18	ナデニ宿	地名
97	元禄4・4・19	境ニ着 宿カリカネテ迷 北口へ出テ断宿ス	地名?
98	元禄4・4・20	山口常春ヲ尋 未ノ剋ニ及 即宿ス	人名
99	元禄4・4・24	書写ノ坂本ニ宿	地名
100	元禄4・4・25	西谷ニ宿	地名
101	元禄4・4・26	兵庫ニ宿	地名
102	元禄4・4・27	西宮ヲ拝テ同所ニ宿ス	●神社?
103	元禄4・4・28	川原崎氏ニ宿ス	人名
104	元禄4・4・29	大網氏へ尋テ宿	人名
105	元禄4・4・30	田中へ帰テ宿	人名
106	元禄4・5・1	田中氏ニ宿ス	人名
107	元禄4・5・5	大和やへ行テ宿	場所
108	元禄4・5・11	小川へ帰宿ス	場所
109	元禄4・5・12	同所ニ宿ス	場所(小川)
110	元禄4・5・13	北野へ戻テ主ヲ待 昼ニ及 入来 終日談 畢帰 宿ス	場所(北野?)
111	元禄4・5・14	中村荒右へ行宿	人名
112	元禄4・5・15	終日史邦宿	人名
113	元禄4・5・16	荒右ニ宿	人名
114	元禄4・5・17	清水ニ行 帰宿ス	?
115	元禄4・5・18	荒右へ 宿	人名
116	元禄4・5・19	小川ニ 宿ス	場所
117	元禄4・5・21	北野へ趣 宿	●神社
118	元禄4・5・22	田中氏へ帰テ宿ス	人名
119	元禄4・5・23	小川ニ帰テ宿ス	場所
120	元禄4・5・24	小川ニ帰テ宿ス	場所
121	元禄4・5・25	小川ニ帰テ宿	場所
122	元禄4・5・28	小川へ行 宿ス	場所
123	元禄4・5・29	中村ニ宿	人名
124	元禄4・6・1	中村ニ宿ス	人名
125	元禄4・6・2	中村へ行 宿ス	人名
126	元禄4・6・3	小川へ帰テ宿	場所
127	元禄4・6・6	田中へ戻テ宿ス	人名
128	元禄4・6・7	小川ニ宿	場所
129	元禄4・6・8	又小川へ行テ宿	場所
130	元禄4・6・9	乙州來テ宿ス	?
131	元禄4・6・9	中村ニ宿ス	人名
132	元禄4・6・10	本福寺ヲ尋テ宿ス	●寺

曾良旅日記中の「宿」

No.	年月日	本文	種別
133	元禄4・6・11	茶やへ帰テ宿	場所
134	元禄4・6・11	此所ニ宿ス	場所(茶屋)
135	元禄4・6・12	中村ニ宿ス	人名
136	元禄4・6・13	田中へ行テ宿ス	人名
137	元禄4・6・14	中村へ行テ宿	人名
138	元禄4・6・15	北野へ趣 病氣不快故薬ヲ服ス 夕方雨降宿ス	●神社
139	元禄4・6・16	北野ニ宿	●神社
140	元禄4・6・18	北野ニ帰宿	●神社
141	元禄4・6・19	小川へ帰ル 予 丈草ト宿	場所
142	元禄4・6・20	田中へ來テ宿	人名
143	元禄4・6・21	中村へ行テ宿ス	人名
144	元禄4・6・22	金兵ニ會 宿	人名
145	元禄4・6・23	帰宿	●神社(北野か)
146	元禄4・6・24	帰リ宿	●神社(北野か)
147	元禄4・6・25	北野へ帰テ宿	●神社
148	元禄4・6・26	久我へ來テ宿	地名
149	元禄4・6・27	芥川ニ宿ス	地名
150	元禄4・6・28	浄春ニ宿	人名
151	元禄4・7・2	古市ニ宿ス	地名
152	元禄4・7・3	西室坊ニ宿ス	場所
153	元禄4・7・4	廣瀬ニ 宿	地名
154	元禄4・7・5	南坊ニ宿	場所
155	元禄4・7・6	帰テ宿	？
156	元禄4・7・8	ヲタル广ニ行 暮 宿不借シテ迷	場所
157	元禄4・7・8	同所吉村与惣兵へニ 宿ス	人名
158	元禄4・7・9	鴨ニ到 宿ス	地名
159	元禄4・7・12	長善寺ニ宿ス	●寺
160	元禄4・7・13	ウヂイソノ宗九良ニ宿	人名
161	元禄4・7・16	クモツニ宿	地名
162	元禄4・7・17	小寺氏ニ 宿ス	人名
163	元禄4・7・18	森ニ宿	人名
164	元禄4・7・19	森氏ニ宿ス	人名
165	元禄4・7・20	小寺へ帰テ宿ス	人名
166	元禄4・7・22	小芝ニ宿	人名
167	元禄4・7・23	安田へ行宿	人名
168	元禄4・7・24	小芝ニ宿ス	人名

Supplement of The survey of the difference of the expressions between for temples and for shrines in Travel Diary written by KAWAI Sora in 1689 and 1691.

AIZAWA, Hirokazu

This paper is intended to supplement my previous paper : The survey of the difference of the expressions between for temples and for shrines in Travel Diary written by KAWAI Sora in 1689 and 1691. (Bulletin of the Graduate School, Toyo University Graduate School of Letters, Course of Japanese Literature and Culture. Vol.54 2017)

The previous paper was intended to show mainly the difference of the usage of the words : 拝 (ogamu or hai) , 参 (mairu or san) , 詣 (moudzu or kei) esp. for shrines or temples in Travel Diary written by KAWAI Sora in 1689 (Genroku 2) and 1691 (Genroku 4) .

This paper is intended to show the supplement for the lack of the previous paper : the words 宿 (lodge or stay) and 寄 (stop by at) which are also said to be expressions for temples, and is intended to show the possibility that these words are used not for only temples.